

からだとことばで、 「みる」を楽しむ鑑賞



立川泰史

東京家政学院大学 准教授

幼稚園・保育園とのつながりを大切にした 鑑賞題材

今日の幼児教育は、身近な自然や生活に触れる遊びを通して学ぶことを大切にしています。自分の目や手で、日々新鮮な出会いを何度も楽しみます。そのように、目や手に残る実感や理解は、図画工作科でも重視されています。なぜなら、こうした体験が、身近なものに触れるたびに面白さを感じたり、縁が無いと思っていたものにつながりを発見したりする場となるからです。そして、既存の世界を読み直し、知識を語り直す想像力や表現力の育ちが期待できます。

では、こうした出会い方を支えているのは何でしょう。そのひとつは、対象に新しいよさを感じ、何度も出会い直す「しなやかな見方や感じ方」です。新鮮な出会いを繰り返し、子どもたちは自分の感覚とことばで「みること」を楽しみます。

そこで、鑑賞の実践題材では、ひとつのものを違った面から捉える見方が起動する場面、あるいは対象を比べながらズレや重なりを気付く場面に着目しました。

6年間で育つ力を具体化した鑑賞題材と 「小さな美術館」

「みること」は、目だけの体験ではありません。6年間の鑑賞題材では、「みること」を「全身の感覚に根ざした見方・感じ方を育む場面」と捉えています。子どもは、全身の感覚を使って対象に触れ、おおまかな全体像

を描くからです。

低学年の鑑賞題材は、まず素材に体を投じ、操作しながら感覚を働かせることを重んじた「して・みる」こと、身近なものの特徴を捉えて「なって・みる」ことなどをテーマにしました。それぞれの題材に続く「小さな美術館」でも、作品の肌触りを楽しむ作品やパブリックアート、身に付けながら「何かになってみる」ウェアラブル・アートなどを扱っています。

中学年の鑑賞題材は、気に入ったものの集まりからよさや美しさに気付く「あつめて・みる」こと、対象から音やリズムを想像する「きいて・みる」ことなどに着目しています。関連する「小さな美術館」でも、集まったものが新しい意味になる作家作品、作品から感じた音の響きを形や色で表現する事例などを扱っています。

高学年の鑑賞題材は、作品を比べてみることで気づくよさや美しさに着目する「くらべて・みる」、また、作品が生まれた背景を連想しながら美しさを発見する「つなげて・みる」ことがテーマです。また「小さな美術館」でも、隣り合わせにすると意外な共通点や個性がわかる作品、異文化が知識とつながる作品を扱っています。

このように、6年間の鑑賞題材を通じて、身体感覚や新たな認識の芽生えを実感する経験が、造形的な見方・感じ方で美術に親しむ学習へと自然に発展していきます。

